

定冠詞の文法化について

茨木正志郎

1. 序論

Mustanoja (1960), 中尾 (1972), 小野・中尾 (1980) などによれば, (1) に示されるように, 定冠詞 *the* は現代英語の *that* に相当する古英語の男性・主格・単数の遠隔指示詞 *se* より生じたと言われている。

(1) *se* (=‘that’) → *the*
 OE PE

古英語指示詞 *se* は, 現代英語であれば定冠詞 *the* が期待される文脈で使われており, 直示的機能と前方照応的機能を持っていたが, それぞれの機能に特化した定冠詞と指示詞へ発達したと言われている。Osawa (2003) や Roberts and Roussou (2003), Wood (2003), Watanabe (2009), Gelderen (2011) などは, 定冠詞の発達を文法化の一例であると主張している。

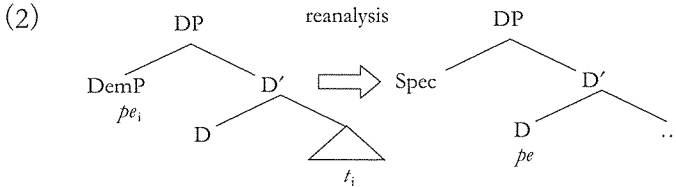
英語の定冠詞が指示代名詞から発達した事実は広く知られているが, 言語理論に基づく分析はこれまで十分に行われてきたとは言えない。本論では, (1) の変化に対し文法化の観点からの新たな分析を試み, その統語位置と構造上における変化を明らかにする。

2. 古英語指示詞の統語位置

この節では, 古英語指示詞の統語位置について議論する。指示詞は指定部要素であると仮定する先行研究が多いが, そのような分析は問題があることを指

摘し、指示詞は古英語より主要部要素であったと主張する。そして、このような主張を支持する証拠をコーパスを用いた調査結果より示す。

Watanabe (2009) や Gelderen (2004, 2011) などの先行研究は、おおよそ (2) に示すように、古英語の指示詞は指定部に位置しており、後に主要部として再分析されると主張している。



(cf. Watanabe (2009: 368))

Watanabe (2009) によれば、古英語の指示詞はDPよりも低い位置で基底生成され、D主要部が持つ定性の形式素性と Agree 関係に入った後、DP指定部へ繰り上がっていた。中英語初期に、定性の形式素性は意味素性へパラメーター変化し Agree 関係が失われると、指示詞がD主要部へ直接併合されるようになった。

しかしながら、このような分析には問題がある。(2) に示される再分析は、Gelderen (2004) での Head Preference Principle (以降、HPP) の一例であると捉え直すことができる。

(3) Head Preference or Spec to Head Principle:

Be a head, rather than a phrase

(Gelderen (2004: 11))

HPPは指定部要素であるよりも主要部要素である方が経済的であるという原理で、(2) の再分析はこの原理に従った変化である。一般に、文法化の過程で古い形式が新しい形式に変化する時、それら両方が共存する過渡期を含むと考えられる。Gelderen (2004) は、英語の補文標識がHPPに沿って指定部から主要部へ再分析されたと主張し、この変化を支持する証拠として (4) を提示している。

- (4) a. monig oft gecwæð þæt te suð ne norð
 ... oþer ... selra nære
 many often said that that south nor north
 other better not-was
 ‘It was often said that no better one could be found north or south’

(Beowulf 858)

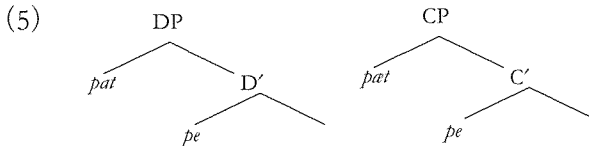
- b. forðam wearð ylða bearnum undyrne cuð
 gyddum
 therefore became to-elders to-children not-hidden
 known through-tales
 geomore þæt þe Grendel wan hwile wið
 Hroþgar
 sadly that that Grendel fought while against
 Hrothgar

‘Therefore, all mankind found out in sad tidings that Grendel fought against Hrothgar’

(Beowulf 149–151)

(4) では、二つの *that* が現れており、Gelderen は一つが CP 指定部を占めもう一つが C 主要部を占めると仮定している。

したがって、もし (2) の再分析を仮定するならば、(5) に示すように、DP でもその指定部と主要部の両方が占められている事例が期待される。



実際に、ハンガリー語のように指示詞が DP 指定部を占めていると考えられる言語では、指示詞と定冠詞が共起する事例が観察される。

(6) ez a haz (Hungarian)
 this the house
 ‘this house’

(Bernstein (1997: 93))

(6) では、指示詞 *ez* と定冠詞 *a* が主要部名詞 *haz* の前に現れており、それぞれ、DP 指定部と主要部を占めていると考えられる。また、Ibaraki (2011) によれば、指示詞から定冠詞への発達は12世紀後半から始まり14世紀前半に完了した。もし(2)の文法化を仮定するのであれば、12世紀～14世紀にかけて、(6)のような事例がある程度見つかることが期待される。

しかしながら、古英語コーパス *The York Toronto Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose*¹ (以降、YCOE) と中英語コーパス *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second edition*² (以降、PPCME2) を用いた調査では、そのような事例は、15世紀の文献からの(7)の一例しか見つけることができなかった。

(7) thys the worscheppe (CMGREGOR, 223.2202: m4)
 Ibaraki (2011) に従えば、15世紀はすでに定冠詞への文法化が終わっている時期である。(2)の再分析を支持するのであれば、(7)のような事例が12世紀後半から14世紀にかけてある程度見つけられなければならないが、その時期には一例もコーパス調査において見つけることができなかった。

また、Ibaraki (2009) の調査では、前位限定詞、中央限定詞、後位限定詞についてコーパス調査を行い、その結果から古英語の指示詞はD主要部を占めていると主張している。具体的には、指示詞は古英語より他の中央限定詞と共起せず、一方、*all* や *half* などの前位・後位限定詞とは共起することを、コーパス調査から明らかにしている。つまり、指示詞は中央限定詞だったので、前位・後位限定詞とは共起しても、同じ主要部を占める中央限定詞とは共起しなかったと結論づけている。

ここでは、コーパス調査の結果と Ibaraki (2009) の分析に従って、指示詞は古英語より主要部要素であったと主張する。もともと主要部要素であったので、現代以前の英語において指示詞と定冠詞が同一名詞句内において共起することは無かった。

3. 定冠詞の文法化

2節では、先行研究の分析の問題点を指摘し、指示詞は英語史を通じて主要部要素であったと仮定した。2節での議論に基づいて、本節では指示詞から定冠詞への発達は、素性の変化に原因があると主張する。そして、素性変化に伴う、統語構造上における再分析を示す。

3.1節で、定冠詞の文法化を扱っている Roberts and Roussou (2003), Watanabe (2009), Gelderen (2011) を概観し、それらの問題点を指摘する。3.2節では、先行研究の問題点を克服できる本論での提案を提示する。

3.1. 先行研究

3.1.1. Roberts and Roussou (2003)

ロマンス語の定冠詞は、(8) に示すように、ラテン語の指示詞 *ille* からの文法化であると言われる。

(8) Latin:	Masculine	Femine	Neuter
(Nom)	ille/illi	illa/illae	illud/illa
(Acc)	illum/illos	illam/illas	illud/illa
French:	le/les	la/les	
Italian:	il/i	la/le	
Portuguese:	o/os	a/as	

(Roberts and Roussou (2003: 133))

Roberts and Roussou (2003) は、ロマンス語の定冠詞の文法化を (9) に示すように分析している。ロマンス語の定冠詞と英語の定冠詞の発達は非常に似ているので、(9) の分析で英語の定冠詞の文法化を扱う可能性がある。

(9) *Romance Determiners*

i. Structural change: $[_{DP} [_{Demp} \textit{ille}]_{D..}] > [_{DP} D (\textit{il})/e]$

ii. Parametric change: $D [+def] > D [+def]^*$

iii. Cause: loss of morphological case marking on DP

(Roberts and Roussou (2003: 196))

ラテン語の指示詞 *ille* からロマンス語の定冠詞への文法化は、指定部要素から



主要部要素への再分析で、これは2節で見たWatanabe (2009) の分析と同じである。Roberts and Roussouは、指定部から主要部への再分析は、格形態素が消失したタイミングで起こると主張している。また、格形態素の消失とは別に、再分析の起こる原因として [+demonstrative] 素性の消失もあげている。

しかしながら、(9) の分析にはいくらか問題があるように思われる。まず、(9i) の再分析を仮定すると、2節で見たWatanabe (2009) と同じ問題が起こる。つまり、指定部と主要部両方を要素が占める事例を予測するが、実際のコーパス調査ではそのような事例は見つからなかった。

次に、Amano (2006) によって指摘されているように、(9 iii) の文法化の原因にも問題がある。Mitchell (1985) は、古英語に完全な定冠詞は存在していなかったが、指示詞 *se* が定冠詞として使われることもあり、厳密に定冠詞か指示詞か分類することが難しい場合があると述べている。このことは、屈折が豊かであった時代においても、定冠詞としての用法があったことを意味する。したがって、形態の消失を定冠詞の発達の直接の原因として関連付けるのは問題がある。

3.1.2. Watanabe (2009)

2節でも概観したが、Watanabe (2009) は定冠詞の文法化を指定部から主要部への再分析と仮定している。しかし、その原因は形態素の消失や水平化ではなく、指示詞の持つ解釈不可能な定性の素性が形式素性から意味素性へパラメーター変化したであると主張している。その結果、D主要部と指示詞との間で Agree関係が無くなり、DP指定部移動していた指示詞は直接D主要部に併合されるようになった。Watanabeは定冠詞の出現以外にも、(10) に示す数量詞や自由関係詞、指示詞関係代名詞、形容詞の強弱屈折の消失も、形態素性による一致の消失によって説明できると主張している。

- (10) a. $[_{DP} [_D \text{ ge}] \text{ WH}]$ → impossible (quantifier)
- 
- b. $[_{DP} [_D \text{ swa}] \text{ WH}]$ → impossible (free relative)
- 

- c. $[_{DP} D NP [_{CP} dem C TP]] \rightarrow impossible$
 (demonstrative relative pronoun)
- d. $[_{DP} D [_{AP} N]] \rightarrow impossible$ (adjective)

(cf. Watanabe (2009: 368))

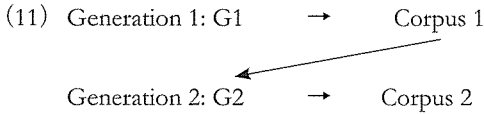
(10a) は古英語の数量詞に関する構造である。古英語では、接頭辞 *ge-* を Wh 句につけることで、様々な数量詞を作ることができていた。(10b) は自由関係詞の事例で、(10c) は指示詞関係代名詞の事例である。(10d) は形容詞に関する構造で、形容詞に強弱屈折が存在していたのも、形式素性による一致のためであった。Watanabe は、これら一見するとお互いに関連が無い4つの言語変化が、一つのパラメーター変化を仮定することで、説明できると主張している。しかし、そのような分析は、以下で述べるように問題が多いように思われる。

まず、縄田 (2005) が指摘するように、文法化がパラメーター変化であると仮定すると、そのパラメーターに属する全ての語彙項目に関して急激な変化を同時に引き起こすことになるが、実際の変化は個別の項目ごとに漸次的に起こるという問題がある。Watanabe は (10c) と (10d) は、どちらも定性の素性が形式素性から意味素性にパラメーター変化したために起こったと主張しているが、中尾 (1972) によれば、指示詞の屈折の消失は形容詞のそれよりも遅れて起こったと述べられている。屈折の消失は形式素性の消失を意味するので、屈折消失に関する形容詞と指示詞の時代のずれは、パラメーター分析を仮定する Watanabe にとって重大な問題となる。

また別の問題として、Watanabe はパラメーター変化の原因を明らかにしていない。なぜパラメーターが変化したかを明らかにしない限り、ただの事実の言い換えになってしまう可能性がある。

さらに、言語変化をパラメーター変化として分析する際に考慮すべき Roberts (2007) での回帰の問題もある。回帰の問題とは、文法化の原因を突き止めることができなくなってしまう問題である。Roberts (2007) によれば、言語変化をパラメーター変化として捉えると、文法化は仮説的推論によって起こると主

張している。仮説的推論による変化は (11) のように表すことができる。



(Roberts (2007: 124))

(11) での G (grammar) 1 はパラメーターセットされた UG であり, G1 をもつ Generation 1 によって Corpus 1 が現れる。Generation 2 は, Corpus 1 によって G2 のパラメーターをセットする。このような仮説的推論に基づく, (12) の回帰の問題が起こる。

(12) Regress Problem

... an innovation in Corpus 2 may be ascribable to a mismatch in G2 (compared to G1), but it must have been triggered by something in Corpus 1 - otherwise where did it come from? But if Corpus 1 could trigger this, then how could G1 produce this property without itself having the innovative property?

(Roberts (2007: 126))

(12) は, (11) において, G2 が変化するにはまず Corpus 1 が変化しなければならないが, そうすると Corpus 1 を生み出す G1 がなぜ変化したのか, という問題が現れる。つまり, Corpus 1 が変化するためには, G1 より前の世代の Corpus が変化していなければならない。このように, 変化の原因が無限に先送りにされ突き止めることができない, という問題である。

Watanabe (2009) はパラメーター変化の原因を明らかにしておらず, さらに, 言語変化をパラメーター変化として捉える際に考慮しなければならない, 回帰の問題にも答えていない。次節では, 文法化をパラメーター変化に頼らない Gelderen (2011) の分析を概観し, その問題点を指摘する。

3.1.3. Gelderen (2011)

Gelderen は, (13) の素性の経済性によって, ある要素の持つ素性が経済的なものに変化するので, 種々の言語変化が起こると仮定している。

(13) Feature Economy

Minimize the semantic and interpretable features in the derivation, for example:

Adjunct		Specifier		Head		Affix
semantic	>	[iF]	>	[uF]	>	[uF]

(Gelderen (2011: 17))

素性の経済性は、素性は意味的なものより解釈可能な形式素性の方が経済的で、解釈可能なものより解釈不可能なものがさらに経済的であると仮定している。(13)のクラインは否定辞の文法化のものである。否定辞要素が付加詞から主要部まで変化し解釈不可能素性を持つようになると、それに値を与えるために意味素性か解釈可能素性を持つ新たな要素が導入され、言語循環が起こると主張している。素性の経済性は、(14) (15) に示す Gelderen (2004) での言語変化を説明する HPP と Late Merge Principle (以降, LMP) を捉え直したものである。

(14) Head Preference Principle (HPP):

Be a head, rather than a phrase.

(Gelderen (2011: 17))

(15) Late Merge Principle (LMP)

Merge as late as possible

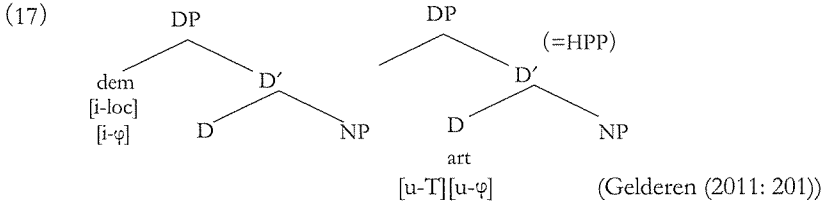
(Gelderen (2011: 14))

LMP は、ある要素を一旦併合させてから移動させるよりも、当該位置へ直接併合させた方が経済的であるというものである。Gelderen はある要素の素性が意味から解釈可能な形式素性へ、解釈可能なものから解釈不可能なものへ変化すると、その統語位置も指定部から主要部へ、さらにより高い主要部へ変化すると主張している。

Gelderen (2011) は、古英語指示詞の持つ素性が (16) のクラインに沿って変化すると仮定しており、その結果、(17) に示すように、指示詞の統語位置も HPP に従って指定部から主要部へ再分析されると主張している。

(16)	OE	>	ME
	<i>se</i> [i-loc]/[i-φ]		<i>the</i> [u-T]/[u-φ]
	specifier		head

(cf. Gelderen (2011: 213, 219))



(16) では、古英語指示詞 *se* は解釈可能な場所素性と ϕ 素性を持っていたが、中英語には解釈不可能な時制素性と解釈不可能な ϕ 素性を持つようになる。その際、指示詞の統語位置も指定部から主要部へと変化し、定冠詞へと文法化される。

しかしながら、Gelderen (2011) の素性の経済性による分析にも問題がある。まず、なぜ指示詞が解釈可能素性を持ち、定冠詞になると解釈不可能素性を持つようになるのかが曖昧である。Watanabe (2009) のように、指示詞の屈折形態が解釈不可能素性と関連させる分析もあるので、指示詞が解釈不可能素性を持つ可能性や、定冠詞が形式素性を持たない可能性も検討する必要がある。

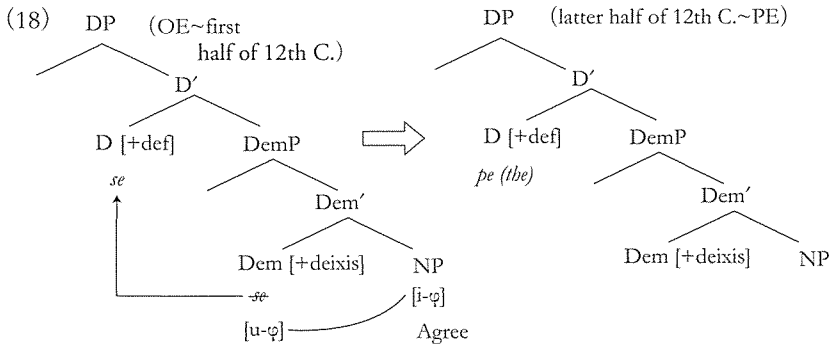
次に、素性の変化と統語位置の変化との関連が不明確である。なぜ、指示詞を持つ解釈可能素性が解釈不可能なものに変化すると、指定部から主要部へ再分析されるのかを明らかにしていない。

さらに、素性の経済性という仮説そのものに問題があるように思われる。素性の経済性は、意味素性より解釈可能な形式素性が経済的で、解釈可能なものより解釈不可能なものの方がより経済的であると仮定している。その理由として、意味素性より形式素性の方が Agree 関係や移動を引き起こして派生を進める機能を持ち、解釈不可能素性の方が、さらに派生を進めることのみの特化しているからであると述べている。このような仮定を推し進めると、そもそもなぜ非経済的な意味素性や解釈可能素性を持つ要素が存在するのかという疑問が生じる。また、Gelderen は、文法化が進み素性が解釈不可能なものになると、それに値を与える意味素性・解釈可能素性を持つ要素が新たに導入されると主張しているが、素性の経済性に従うのであれば、非経済的な意味素性や解釈可能素性を持つ要素よりも、解釈不可能な素性を持つ要素が導入される可能性も検討する必要がある。

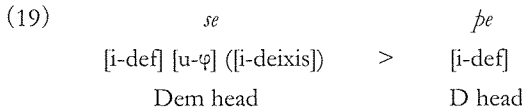
3.2. 提案

3.1節で概観した先行研究の問題点をふまえ、文法化をパラメーター変化にも素性の経済性にも頼らない、本論での分析を提案する。文法化の起こる原因は Hopper and Traugott (2003) での意味の漂白化によるもので、指示詞の持つ [i-deixis] 素性の消失により起こると主張する。素性の消失は、Roberts and Roussou (2003) や Watanabe (2009) によっても言及されているが、ここではさらに、意味の漂白化が起こる原因についても考察し、回帰の問題にも答えたい。

2節で、古英語の指示詞は主要部要素であると仮定した。ここでは、指示詞から定冠詞への文法化は、(18) に示す Dem 主要部から D 主要部への再分析であると提案する。^{3,4}



この変化は Dem to D 移動パラメーターの変化として捉えることができる。(18) の再分析を引き起こすのは、(19) の指示詞の持つ素性の変化であると主張する。



(19) の素性の消失が起こるのは、水平化による形式の統一と頻度の増加によるものであると主張する。

まず、(18) では、古英語の指示詞は解釈不可能な φ 素性を持ち、Dem 主要部に基底生成されると仮定する。解釈不可能素性が探査子となり、後続する名詞の解釈可能素性と Agree 関係に入る。値を受け取った指示詞は、名詞の人称・

数・性と一致して、その形態を変化させる。その後、指示詞はDem to D移動によって、D主要部へ繰り上がる。この移動は、(20)のIbaraki (2009)の定性の原理に従うものである。

- (20) Definite noun phrases are licensed iff the [+definite] feature of D enters into a checking relation with its matching element(s) in a Spec-head and/or head-head configuration.

(Ibaraki (2009: 84))

Ibaraki (2009)によれば、名詞句の定性が認可されるのは、D主要部の [+definite] 素性を持つD主要部が、その指定部が主要部に定性を持つ要素によって占められ、指定部-主要部もしくは主要部-主要部関係に入ることができた場合でありその場合に限られる。⁵指示詞はDPの [+definite] 素性を認可するために、D主要部へ繰り上がると仮定する。

(19)で、[i-deixis] 素性が括弧で括られているのは、指示詞_{se}は、指示詞としても定冠詞としても使われることがあったので (Mitchell (1985))、指示詞として使われる場合は [i-deixis] 素性を持ち、定冠詞として使われる場合はそのような素性は持たない。名詞句が指示詞を含む場合は、その名詞句は直示性を持つ。名詞句の直示性が認可される場合も、定性の場合と同様に、Dem主要部にある [+deixis] 素性が照合されることで認可される。(18)の古英語の樹形図では、指示詞がDem主要部に基底生成されるので、その位置で [+deixis] 素性を照合する。その後、D主要部へ移動して名詞句の定性が認可される。⁶

(19)に従って、指示詞が [i-deixis] 素性を失うと、Dem主要部の [+deixis] 素性を照合する能力を失うので、直接D主要部に併合する要素として再分析される。また、定冠詞は解釈不可能な \emptyset 素性も失っているので、名詞とのAgree関係も失われ屈折しなくなり、定性の [i-definite] 素性のみを持つより機能的な要素として文法化される。この分析は3.1.3節で指摘したGelderen (2011)の問題を克服できることに注目されたい。つまり、Dem主要部からD主要部への統語位置の変化は [i-deixis] 素性の消失と関連付けられている。

次に、(18)の再分析の原因に関して、仮にこの再分析を単にDem to D移動

パラメーターの変化, もしくは指示詞の持つ素性の変化として捉えると, 単に事実の言い換えになってしまう可能性がある。そこで, 再分析を引き起こす(19)の [i-deixis] 素性の消失, つまり, 意味の漂白化の動機について考察する。具体的には, 屈折の水平化に伴って指示詞の現れる統語環境が変化し, その使用頻度が増加したことに起因すると主張する。Hopper and Traugott (2003) によれば, 使用頻度の増加は意味の漂白化を引き起こす原因と見なされている。⁷本論では, 頻度の増加が定冠詞の文法化を引き起こした重要な一因であると主張する。

古英語の指示詞は人称・数・性・格に応じて形態を変化させていた。Ibaraki (2011) によれば, 12世紀後半より, 様々な異形態を持っていた指示詞 *se* は *þe* の形式へ急速に水平化されていった。

(21) *se* → *þe* (definite article)

latter half of 12th C. ~ first half of 14th C.

水平化の結果, (22) に示すように, 後続する名詞の人称・数・性・格と関係なく, *þe* が使われるようになった。

(22) a. ... mid his biscopes & mid *þe* lerede folc

... with his bishops and with the learned people

‘... with his bishops and the learned people’

(cochronE-INTERPOLATION, ChornE_[Plummer]: 656.128.480: o3)

b. ... *ealle* *þe* *biscepas* ...

... all the bishops ...

‘... all the bishops ...’

(cochronE-INTERPOLATION, ChronE_[Plummer]: 675.40.545: o3)

(22) では, 後続する名詞は複数であるにもかかわらず, *þe* が使われている。

本来であれば, (23) に示すように, 名詞 *folc* と *biscepas* は複数の屈折を示す指示詞 *þa* が現れるべき環境である。

(23) a. ... wið eal þa folc

... with all these people

‘... with all these people’

(Coorosiu, Or_5: 10.123.28.2593: o2)

b. Ond ealle þa biscopas him ondswordon
 and all these bishops him answered
 ‘... and all these bishops answered him’

(cobede, BedeHead: 2.12.6.44: o2)

屈折の水平化が進み、指示詞の形式が *þe* に統一されると、名詞の人称・数・性・格と関係なく *þe* が使われるようになった。

形式の統一と同時に、使用頻度に関しての変化も観察される。中尾 (1972) によれば、水平化によって、単数・男性・主格の指示詞 *se* の *s-* が *þ-* に置き換わった。

(24) *se* → *þe* (replacement of *s-* by *þ-*)

(22) で見たように、*þe* は *se* 以外の異形態の統語環境にも現れることになったので、その使用頻度も急激に増加した。Ibaraki (2011) の YCOE と PPCME2 を利用した調査に基づくと、*se* と *þe* の使用頻度は (25) のようにまとめられる。

(25)	<i>se</i>	<i>þe</i>	
OE2 (850–950)	20.1%	0.1%	
OE3 (–1050)	31.0%	0.1%	
OE4 (–1150)	15.4%	0%	
ME1 (–1250)	4.1%	84.6%	
ME2 (–1350)	0.2%	94.2%	(cf. Ibaraki (2011: 186))

(25) では、*se* は最大でも全体の3割程度しか使われなかったが、ME1期に入り、急に *þe* が全体の8割以上使われ始め、ME2期には94パーセントまで使われるようになっていく。このように、水平化によって *þe* の使用頻度が劇的に増加した。様々な統語環境に現れるようになったことと、使用頻度が増えたことにより、*þe* は純粋な前方照応機能を持つ要素として、[deixis] 素性を持たない定冠詞として分析されるようになったと主張する。

4. 結語

指示詞 *that* が定冠詞 *the* へ発達した事実はよく知られているが、言語理論に

基づく説明は十分に行われてこなかった。本論ではこの変化に対して文法化の視点から分析を試みた。まず、コーパス調査に基づいて、指示詞と定冠詞が共起しない事実を指摘し、指示詞は古英語より主要部要素であったと主張した。また、定冠詞の文法化は、[i-deixis] 素性の消失によって、指示詞はDem主要部からD主要部へ再分析されたと主張した。⁸さらに、意味の漂白化は、水平化とそれに伴う頻度の増加によって起きたと主張した。

*本稿は、日本英文学会第86回大会（於北海道大学）において口頭発表した内容に加筆修正を施したものである。本稿の作成に当たり、匿名の査読委員3名の先生方から大変有益なご助言とご示唆を賜りました。心より感謝申し上げます。なお、本研究はJSPS科研費25770180の助成を受けたものです。

注

¹ YCOEは約150万語からなるコーパスである。YCOEに含まれるテキストは、以下の4つの時代に分類される—O1 (-850), O2 (-950), O3 (-1050), O4 (-1150)。

² PPCME2は約120万語からなるコーパスである。PPCME2に含まれるテキストは、以下の4つの時代に分類される—M1 (1150-1250), M2 (-1350), M3 (-1420), M4 (-1500)。

³ (7)の指示詞と定冠詞が共起する例は、コーパス調査より得られた唯一の事例であり、また、指示詞から定冠詞への変化が起こった時期より1世紀以上遅い時期からのものである。したがって、(7)はかなり例外的であるとみなし、本論では扱わない。

⁴ (18)では、DPとNPの間には直示性に関わるDemPが存在すると仮定する。Dem主要部の[+deixis]素性が照合されることで、その名詞句が直示性を持つことができると仮定する。

⁵ 前位限定詞や属格名詞がDPの指定部を占め、指定部-主要部関係によって(20)の条件を満たす場合がある。Ibaraki (2009, 2010)を参照。

⁶ (18)の構造において、12世紀以降、直示性を持たない名詞句はDemPを投射しないと仮定する。

⁷ Hopper and Traugott (2003) は頻度と文法化は緊密に関連があると主張している。例えば、フランス語の *pas* 'step' は、物理移動の否定を強調する語として使われていたが ('doesn't walk a step'), 頻繁に使用されることで移動に関する意味が漂白化され、それ以外の文脈にも利用されるようになった ('doesn't believe (a step)').

⁸ 指示詞が Dem 主要部から D 主要部へ再分析されたと仮定すると、その過渡期にそれら両方の主要部を占める事例が存在することが予想されるかもしれない。しかしながら、2節で議論したように、指示詞と定冠詞が共起する事例は、(7) の例外を除いて、コーパス調査において見つからなかった。この問題の詳細な分析については今後の検討課題としたい。

参考文献

- Amano, Masachiyo. 2006. Toward a More Restrictive Characterization of Grammaticalization. *English Linguistics* 23, 58–85.
- Bernstein, Judy B. 2001. The DP Hypothesis: Identifying Clausal Properties in the Nominal Domain. *The Handbook of Contemporary Syntactic Theory*, ed. by Mark Baltin and Chris Collins, 536–561. Oxford: Blackwell Publishers.
- Gelderen, Elly van. 2004. *Grammaticalization as Economy*. Amsterdam: John Benjamins.
- Gelderen, Elly van. 2011. *The Linguistic Cycle: Language Change and the Language Faculty*. Oxford: Oxford University Press.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott. 2003. *Grammaticalization*, 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ibaraki, Seishirou. 2009. The Development of the Determiner System in the History of English. *English Linguistics* 26, 67–95.
- Ibaraki, Seishirou. 2010. On the Distribution of Genitives in the History of English: with Special Reference to the Development of '-S. *English Linguistics* 27, 329–343.
- Ibaraki, Seishirou. 2011. *A Diachronic Study of the Structure of English Noun Phrases*. Doctoral dissertation, Nagoya University.
- Mustanoja, Tauno F. 1960. *A Middle English Syntax*. Helsinki : Société Néophilologique.
- Mitchell, Bruce. 1985. *Old English Syntax*, 2 vols. Oxford : Clarendon Press.
- 中尾俊夫. 1972. 『英語史II』東京：大修館書店。
- 縄田裕幸. 2005. 「分散形態論による文法化の分析：法助動詞の発達を中心に」, 秋

- 元実治・保坂道雄（編）『文法化：新たな展開』75-108. 東京：英潮社.
- 小野茂・中尾俊夫. 1980. 『英語史1』東京：大修館書店.
- Osawa, Fuyo. 2003. Syntactic Parallels between ontogeny and phylogeny. *Lingua* 113, 3-47.
- Roberts, Ian. 2007. *Diachronic Syntax*. Oxford: Oxford University Press.
- Roberts, Ian and Anna Roussou. 2003. *Syntactic Change: A Minimalist Approach to Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Watanabe, Akira. 2009. A Parametric shift in the D-system in Early Middle English: Relativization, Article, Adjectival inflection and Indeterminates, *Historical Syntax and Linguistic Theory*, ed. by Paola Crisma and Giuseppe Longobardi, 358-374. Oxford: Oxford University Press.
- Wood, Johanna L. 2003. *Definiteness and Number: Determiner Phrase and Number Phrase in the History English*. Doctoral dissertation, Arizona State University.

コーパス

- Kroch, Anthony and Ann Taylor. 2000. *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second edition (PPCME2)*, Philadelphia: University of Pennsylvania.
- Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk and Frank Beths. 2003. *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE)*, Heslington: University of York.

Synopsis

On the Grammaticalization of the Definite Article Seishirou Ibaraki

It is well-known that the definite article has developed from demonstratives in the history of English, but this has not been sufficiently analyzed on the basis of linguistic theory. This paper aims to analyze the development of the definite article, and gives it the principled account within the framework of generative grammar and the theory of grammaticalization put forward by Hopper and Traugott (2003).

Most previous studies (Watanabe (2009), Gelderen (2004, 2011) among others) argue that demonstratives in OE occupied the specifier position of DP, and were reanalyzed as the head element during ME. Such analysis predicts that both specifier and head positions would be filled by demonstratives in a transitional period, but no such instance is attested in the investigation based on YCOE and PPCME2. Thus, following Ibaraki (2009), it is assumed that the position of demonstratives has been the head of DP, not the specifier of DP.

Roberts and Roussou (2003) argue that the development of Romance determiners out of demonstratives was caused by morphological reduction, but this seems to be dubious for the case of the English definite article *the* because demonstratives could be used as the definite article even in the period OE, when inflection was still rich (Mitchell (1985)). This means that there is no direct connection between the development of the definite article and morphological reduction. Also, Watanabe (2009) attempts to analyze the development of the definite article by a parametric shift, but he does not provide an account for what caused the parametric shift nor discusses Regress problem (Roberts (2007)), which must be considered when we deal with issues related to grammaticalization. Gelderen (2011) analyzes the development of the definite article in terms of Feature Economy, but there still remain some problems; for example, it is not clear

how the change of features along with Feature Economy is related to the positional change of demonstratives from Spec to head. After all, no previous study captures nor analyzes the properties of the development of the definite article.

Following the assumption made above that the position of demonstratives has been the head of DP throughout the history of English, this paper proposes that demonstratives in OE which occupy the head Dem position have been reanalyzed as the D element. What caused the reanalysis here is semantic bleaching (Hopper and Traugott (2003)), that is, the loss of the [i-deixis] feature of demonstratives, which is due to the radical increase of the use of the unified form *þe* together with leveling of inflections. It is shown that the proposed analysis here can properly account for the development of the definite article and overcome the problems with the previous studies.